説教20210822ヨシュア24：1-2a、14-25、ヨハネ6：60-69

「内なる証人」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今の世の中では、様々なことを自分で選んでいくことが良いこととされ、又その様にして自分の人生を切り開いていくことが求められているように思います。年頃になれば、行きたい学校や、就きたい職業を選び取り、結婚相手も選び取って、充実した日々を送っていく、といったスタイルは、人生に喜びと価値をもたらすものとして、認められて良いことだと思います。しかし、現状を見てみますと、私たちはそういった人生のスタイルを続けていくのにいささか疲れを感じているのではないでしょうか。

　それには今のコロナ渦も関わっていることでしょう。いうまでもなく、私たち人間は自分が世を去る時を、思いのままに定めることは出来ません。それは人間が生きることの前提であり、当たり前のことであります。そして、一部の狂信的な科学者を除いては、人間がこの地上にあって死なないようにしよう、と考え働いている人はいないのです。私たちはこのことを承知して生きてきたはずなのに、コロナ渦にあって、ある日突然、という形で人の命が取り去られることにショックを受け、それをなかなか受け入れられないでいるのです。

　人が世を去ることがなかなか受け入れられない、ということは、自分が選んでいかねばならないこの世の中では、ますますその度合いを増し加えていることでしょう。せっかくそれまでひたすら自分で選び続けて人生を歩んできたのに、最後はこんなにあっけなく訪れるものなのか、と言って悲嘆に暮れている方々も多くおられることと思います。

　人生において、自分が選び取っていくこと、それは必要なことであり素晴らしいことですが、実は人生はそれだけではありません。それだけでは不十分なのです。実は、人生において選ばれるということは、それ以上に良いことであります。そして、私たちは一人残らず生まれた時から、主イエス様によって選ばれているのです。もっと心に響く言葉に言い換えれば、あなたは生まれた時から、主イエス様に愛されているのです。

　主なる神であるイエス様が私たちを選び、愛されていることを聖書は次のように証言しています。申命記7：6から「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面おもてにいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、、、、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。」又、ヨハネによる福音書15章 16節では主イエスは「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」と言われています。

　私たちは自分で選んでいくことに疲れた時、主イエス様から選ばれ、そして愛され続けていることに思いをいたしましょう。また、まだイエス様のこの愛に気が付いていない方々は、ぜひこの世の重荷をおろして、十字架の前に佇んで、先ほどの聖書箇所などを繰り返し読んでみてください。

　さて今日のヨシュア記の聖書箇所はヨシュアというイスラエルの指導者が語った言葉です。ちなみにヨシュアという名前は、ヘブライ語でイエスにあたる名前です。ですから、イエスの名前を聞いた人たちは、昔に生きたこのヨシュアという人物を思い起こしたに違いありません。そのヨシュアは民たちに次のように言います。「もし主に仕えたくないというならば、川の向こう側にいたあなたたちの先祖が仕えていた神々でも、あるいは今、あなたたちが住んでいる土地のアモリ人の神々でも、仕えたいと思うものを、今日、自分で選びなさい。」つまりヨシュアは仕えるべき神を民たちに選ばせている訳です。そして主なる神を選んだ民たちに言います。「あなたたちが主を選び、主に仕えるということの証人はあなたたち自身である。」ヨシュアはこのように民たちに檄を飛ばして、そして民たちは一つとなって周りの敵たちと戦った訳ですが、この成り行きは今のわたしたちにも大変分かりやすいことではないでしょうか。現代でいえば、民衆に、仕えるべき神を選ばせて国家の団結を図り、外的と対峙していくという成り行きです。私たちは全能で正義のまことの神を選んだのだから、私たちは正義でありまことである、という考えです。

　しかし、私たちは、ここで、主なる神がご自身で語られている御言葉を忘れてはいけまません。先ほど引用した申命記やヨハネ福音書に立ち返って下さい。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」という主イエスの御言葉です。

　このように主なる神は言われているのですから、この御言葉を素直に信じるならば、私たちは、あえて主を選びます、と宣言する必要もないのでしょうが、ヨシュアたちは「主を選んだ」ということ高らかに宣言して、自分たちが主に仕えることの証としたかったのでありましょう。ここら辺にヨシュアたちの団結の人間味が滲みだしている様に感じられますが、この人間味は私たちの心をも動かしやすいものでもありましょう。

　私事で恐縮ですが、自分の体験を振り返って見ましても、私が、自分で主イエスを選んで、主イエスを信じた、という様には全く思えないのです。そうではなくて、なんだか、いつの間にか、主イエスがやってきて、彼を信じるようになったというのが実情なのです。しかしそういう成り行きが、自分が選んだのではなく、主イエスがわたしを選んだということなのでしょう。

　このように、主イエスに選ばれるということには、ヨシュアが民たちに選びを迫ったときの、明快さとは逆の、何かいうに言われない奥ゆかしさのようなものが付きまとうでしょう。なぜならば、神の選びということは神秘であり、人間の目から見れば、どこまで行っても悟りえないという部分を残すことであるからです。ですから、むしろ私たちは神から選ばれた、とはっきりと言い切るほうに慎重になるべきでしょう。

　今日のヨハネの聖書箇所は、その主イエスが、あなた方を選んでいる、という事実を言葉にしている箇所であります。そこには神の選びの神秘が満ち溢れ、確かに、この箇所での主イエスの御言葉は、ヨシュアの言葉のようにすんなりとは私たちの耳に入ってくるものではないでしょう。事実、多くの弟子たちがこの主イエスの言葉を聞いて、「実にひどい話だ」とつぶやいて主イエスの元を離れ去ったのです。もっと分かりやすく言えば、この将来性が全く感じられないイエスという指導者についていくのをやめたのです。

　では、主イエスはどんな御言葉を語ったのでしょうか。先週主イエスは、「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない」と言われました。これは先週お話ししました通り、主イエスという朽ちることのない霊的な食べ物、すなわち神の言葉を私たちが食べて味わうことを言っているのです。そのことを主イエスは、なぜか長い説明は抜きにして次のように、短く語られます。「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。」さて、この御言葉は、私たちが理解するべきことというよりは、信じることであります。主イエスのこの御言葉を信じる、ことが私たちの出発点であり前提であります。ですから主イエスご自身、長い説明は抜きにしてこのように簡潔にこの御言葉を私たちに告げられたのです。

　そして、この御言葉を信じない人たちは、主イエスから離れ去ったのでした。離れさった者の内には、昔の指導者ヨシュアの姿を思い起こして、主イエスがこの地上で政治的、軍事的な指導者として立ち上がることを願い求めていた者も多かったことでしょう。彼らは切に主イエスを指導者として選びたかったのです。彼らの心中は選びたい選びたいという願望でいっぱいになってしまって、そこに自分が主イエスから選ばれているという思いが入りこむ余地がなくなってしまったのでありましょう。

　私たちは、このように自分の願望を主イエスに投影して、いわば自分好みの主イエス像を自分の内に作り上げることを戒めていく必要があるでしょう。そのようなことをしていると私たちは、主イエスから選ばれていることを忘れ、知らず知らずのうちに主イエスから離れ去っていくことでしょう。

　主イエスはヨシュアのようには語りませんでした。「わたしを選びなさい」とは語りませんでした。あくまで主イエスにとっては、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」のであります。

　主イエスは、弟子たちが離れ去って行くのを止めようとはされません。しかし、その後姿を見送る主イエスには、そこはかとない悲しみがあったのではないでしょうか。もし仮にここで主イエスがヨシュアのように「わたしを選びなさい」と言ってしまえば、多くの者は彼のもとに戻ってきたかもしれません。しかしそうやって戻ってきた者のうちに「命を与える霊が宿ることはなく」彼らには何の役にも経たない肉ばかりが残ることを主イエスは知っておられたのでありましょう。ですから主イエスは「わたしを選びなさい」とは言えなかったのです。

　そればかりか、主イエスは12弟子に「あなた方も離れて行きたいか」と念を押されるように言われます。それに対するペトロの答え、「主よ、私たちは誰のところに行きましょうか」という言葉は大変有名ですが「主よ、私たちはあなたをおいて誰のところに行きましょうか」と言われることもあります。

　このペトロの言葉は理屈抜きで、自分が主イエスから選ばれていることを物語る言葉でありましょう。ペトロが主イエスを信じているのは、自分の思いとは違って、主イエスがやってこられて、主イエスが彼を選んだからに他なりません。ペトロは言います「あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」

　私たちは、この世にあって、自ら選ぶことをやめる時、必ず主イエスから一人一人が選ばれていることを知るでしょう。そして主イエスのことを信じた私たちに主イエスは「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。」という御言葉を与えてくださいます。

　私たちはこの世にあって、自らを覆うこの肉のことについて思いをはせる者です。この肉が安らかにそして快く過ごしていけますようにと。そして主イエスはそれに加えて、この世の死を通り抜けて生かされる肉の話をされています。この世の肉では何の役にも立たない、と主イエスは短く語られます。あえてこれに補足するならばこの世の肉に、霊を加えていきなさいということでしょう。

　主イエスは天から下ってきて肉を取って、私たちと同じ人間となられた方です。そしてこの世での肉の苦しみを誰よりも味わった上で、復活され天にのぼられ、自らの霊をわたしたちへと下してくださいました。実はイエス様しか、その霊と肉について、知ったうえで語ることが出来る方は他にはいないのです。ですから、主イエスはこのように短く語るので充分であったのでしょう。後は、私たちがこの主イエスの短い御言葉を信じるかどうかにかかっています。

　しかし心配することはありません、あなたが心を静めて主イエスに向かうとき、あなたはすでに主イエスから選ばれているということに気が付いて、そして御言葉を信じることが出来るようになるでしょう。

祈ります

天にいます

主よ、この世では疫病、地震、大雨、そして不慮の事故が絶えることはありません。どうか、この朽ちる体を持ってこの世を歩む私たちを、あなたが守ってください。

　あなたは、肉は何の役にも立たない、命を与えるのは霊であると言われました。この真理を私たちが頭で理解するのではなく、心と体で信じることが出来るようにしてください。

御言葉である御子イエス様が、天から下って肉となり、日々わたしたちと共に歩んでくださることに感謝します。私たちが恐れ、窮乏、悲しみの中にあるとき、常に御子に立ち返ることが出来ますよう、私たちを励まし勇気づけて下さい。

　私たちがこの世の困難を乗り越えることが出来る知恵を私たちにお与えください。殊に今、この世の国々をリードしておられる為政者たちに必要な知恵と知識を与え、私たちがコロナ渦にあって、着実に御国へと向かう希望と喜びとを備えさせて下さい。

　すべての命の源であるあなたに私たちが立ち返り、希望と喜びとを得ていくことが出来ますように。

父と聖霊と